

# そもそも「教育」ってなんだ？

## - 大学の「教育原理」の授業覚えてますか？ -

¶ 「教育」とは一体何なのか？あなたはこの問い合わせることができますか？

こういう「そもそも教育ってなんだ？」と考える分野は「教育原理」とか「教育哲学」とかいう分野です。教職課程を通過した人なら誰しもが大学の講義で単位を取得しているはずなのですが、内容を覚えていますか？多分一番眠くなるタイプの授業だったと思うのですが…ボクは寝てましたね…w この「教育原理」の分野は「木」で例えるところの「根っこ」の部分なので、一度理解すると、きっと何十年もあなたを支えてくれるハズのものです。でも、身について

変わっちゃいけないもの  
『教育原理』

変わらなきや  
いけないもの  
『教育方略』

図1 変わらないことと変わらなきやいけないもの

ないでしょ（多分…）。でもちょっと知りたいでしょ（←押売り）。

¶ まず「教育」を考える際に①「変わっちゃいけないもの（時間が立っても色褪せないもの）」と②「変わっていかなくちゃいけないもの（日々アップデートしていくもの）」をちゃんと分けて考えることが第一歩です（図1）。もう少し具体的に言うと、①「変わっちゃいけないもの」は「理想」や「理念」等です。一方で「教え方（教育方略）」は日々新しい内容がアップデートされていく②「変わっていかなくちゃいけないもの」です（例えば「障害特性の理解に応じた指導」や「デジタル機器の活用」、「eコンテンツの利用」など）。そして、「教育原理」は前者の①「変わっちゃいけないもの」に当たる部分、つまり一度理解すると何十年も使える知識の部分です。

¶ ちなみに職員室では「ボクはあのやり方は違うと思う」とか、「ワタシは○○先生派だな」など、とかく「あっち派か、こっち派か」という二元論をよく聞きますが（図2）、そういうのはほとんど②の「教え方（教育方略）」で起きていて、逆に①の理念的な部分は人によって大きくブレないであろう（先生間でブレてはいけない）ものです。

¶ さて、興味の有る方にはやんわりと冬休みの宿題的に本をオススメするのですが右の「教育の力（著：苦野一徳 講談社新書）」は1章を読むだけでも「教育の根っことは一体何なのか」を知ることができます。（少し難しいけど新書なのでわかりやすいし、1章だけなら40ページくらいで読み終わりますよ）。でも、もっと手っ取り早く知りたい方のために、以下にサワリだけ書いてみます。

¶ 「公教育」が世の中に現れたのは、ほんの200年前です。「公教育」が生まれる前は、富める者から奪い取るという絶え間ない戦乱の時代、また力の有る者（徳川家康とかチンギスハーンとかナポレオンとか）が「力」によって「民」の「自由」を制限し、束ねる歴史でした。一方で、どの世の中にあっても、どこの土地に居ても、人間は社会の中での「自由」に渴望してきました。「夢や願いに向かって自分の意思で人生を歩みたい！」「自由でありたい！」と。そうした中、200年前のヨーロッパでヘーゲルという哲学者が「人間が自由であるには、人々が自分と自分以外の人の自由を互いに徹底的に承認するしかない！」という「法治」の根源となる考え方を発明しました。それが元になり「自由権」を含む「法」で統治された「法治国家」ができました。

¶ 「公教育」は法治国家の自由権の下において、国民が「夢や願いに向かって自分の意思で人生を歩みたい」という意味での「自由」を実現させていく為の力を付けていく仕組みとして現れたのが起源です。つまり「公教育」とは「自由な夢・願いの実現のための『実力養成の仕組み（スキーム）』」だったのです！（ウラへ続く）



図2 職員室の二元論

### 教育の力

苦野一徳

すべての  
子どもに  
〈生きる力〉を



（ほんどうの意味での  
（よい）教育をつくる道筋を  
いま話題の若き教育哲学者が  
底の底から考えた！）

『表面のように「教育とは自分の願いを自由に実現していくための実力養成の仕組み」を考えると、特別支援教育は障害のある「不自由」なことが多い子どもを「自由へと開放していく」教育のようにも思えてきますよね。』

『例えば、○ちゃんが絵カード選択できるようになると、もっと自由にレストランでの注文ができるのでは？』

『例えば、○君が余暇活動を増やすと、もっと休日を自由に過ごすことができるのではないか？』

『例えば、○さんの他害行動が減ると、もっと自由に外出できるのではないか？』

『例えば、○君が電子マネーを使えるようになると、もっと自由に買い物や移動ができるのではないか？』

『自由の実現に向けての実力養成が教育のど真ん中であると理解することは、特に発達が緩やかな子への教育を考える場合に「まずは何を自由にしてあげられるかな？」という良い着眼点をくれるようにも思います。』

教育哲学的なコラム↓

## 教育によって「自分のことをどんどん好きに」なっていく

- 自分の事を益々好きになるために、自分を磨き、大切にするということ -

『「アナタはアナタ自身のことが好きですか？」また、「小学生の頃、中学生の頃、高校生の頃、アナタ自身のことが好きでしたか？」人生はある側面、自分のコンプレックスとの戦いだったりもするので、ボク自身を振り返ってみても若い時ほど自分に不足しているものに目が向いて苦しむことが多かったように思います。』  
『さて、タイトルのことばをボクは時々思い出しては自分を戒めているのですが、内容を言語化することもあまりないので以下にことばとして起こしてみようと思います。

『「自己有用感」や「自己効力感」、「自尊心」が大切ということばをどこかで聞いたことがあると思います。関連して心理学では「I'm O.K. You're O.K.」という有名なことばがあります。意訳をすると「ワタシもまあまあの存在ね。アナタの存在もオッケー。受け入れられるわ。」というニュアンスです。この一文の行間に込められた意味こそが大切なのですが、「自分の存在をまあまあと思う土台があってこそ、相手の存在を受け入れられる」という「自己有用感」や「自己効力感」、「自尊心」をもつて歩先の効能が、この一文には秘められています。』  
『また、オモテ面の苦野さんの「教育の力」の要約で「人間が自由であるには、人々が自分と自分以外の人の自由を互いに徹底的に承認するしかない！」という一文を引きましたが、この教育の根幹の「自分以外の人の自由を承認する（You're O.K.）」土台が、「ワタシもまあまあの存在よ（I'm O.K.）」にあります。要するに自分自身を嫌いじゃない、自分自身をそこそこ好きだということが、自由に、豊かに人生を歩むことの土台だということです。』  
『転じて、それは先生が教え子にどう指導・支援していけばいいのかという基本姿勢も示していて、

### 「子どもが自分自身の事を嫌いになってしまうような指導・支援を先生はしない」

ことがスタートラインということです。コレを守らないと自分も他人も嫌いな人になっちゃいますよね。

『でも、そこで留まるのではまだまだ<sup>×10</sup>不十分で、スタートラインに加えて、タイトルの「自分を磨くことで更に自分のことをドンドンと好きになっていく営み」を支えていくことが大切あり、その結果、他人の存在を受け入れられる幅も拡がっていきます。そして、それはまさに「キャリア教育」です。特別支援学校のめざす学校像にしばしば「キャリア教育を推進」等と唱われていますが、「自分のことをドンドンと好きになっていけるように、自分を大切にして、自分を磨くことを支えます！」という意味合いにも読み取ることができますよね。そしてそれはスゴくステキに思えます。

『コレを読んでいるアナタ自身もそうですよね。努力をコツコツと積み重ねて、自信のあること、人の為に役立てられることが増えると「ワタシもまあまあの存在かな」ってドンドンと思えるようになっていく。「ワタシサイコー」なんていう自尊心までは必要ないけど「ワタシもまあまあの存在かな」と思うことで、相手を受け入れることにつながっていきます。つまり、「自己有用感」や「自己効力感」、「自尊心」は一周回れば他人の為だったのです。教育は奥深く、そして面白いですよね。』